

カーテンの隙間から差し込む朝日で、ふと目が覚めた。

隣を見ると、真人くんはまだ眠っている。規則正しい寝息を立てて、私に背を向けて。休日の朝は二人ともゆっくりだ。今日はどこにも出かける予定がなく、まるまる一日、家でゆっくり過ごせる。

(……昨日の夜は結局できなかったな)

昨日は私が疲れて、お風呂から上がったままそのまゝソファでうとうとしてしまって。気づいたら真人くんを抱えられてベッドに運ばれていた。「今日はもう寝な」と言われて、そのまま朝までぐっすり寝た。

だから「いつもの感度チェック」を丸一日サボってしまったことになる。

その事実を思い出した瞬間、下腹の奥がきゅうっと縮んだような感覚がした。

(一日、しなかったな……。感度、狂ってないとい

いけど……)

そんなことを考えていると、背後で衣擦れの音がした。真人くんが寝返りを打って、こちらを向いたのだ。まだ半分眠そうな目が、ゆっくりと私を捉える。

「……おはよう。起きてたんだ」

「お、おはよう……」

低く掠れた朝の声。真人くんは私の顔をじっと見つめ、それからふっと口の端をわずかに上げた。

「昨日、できなかったよね。感度チェック」

「っ……そ、それは私が寝ちゃったから……」

「うん。だから今日は朝からしょうか」

「っ……あ、朝から、は……っ」

「朝から、なに？」

真人くんは眠そうな顔のまま、けれどその目だけ

ははっきりと起きていて、私をまっすぐ見ている。

「あの……朝は、その……」

「その？」

「……恥ずかしい……っ」

正直に言ったら、真人くんは少しだけ目を細めた。

「休みだし、時間はたっぷりあるでしょ」

そう言われてしまい、私はこくりと頷くしかなかった。

「先に、シャワー浴びておいで。それから——いつもの下着、着てきて。昨日サボったぶん、感度が鈍ってないか、丁寧にチェックしなきゃいけないからね♡」

シャワーを浴びたあと、脱衣所に用意されていた下着を身につける。レースの布は紐のように細く、

乳首と股の部分だけが丸見えになる形をしていた。

(……休みだからって、朝からこんなの着るなんて)

けれど大人しく下着を身につけて、そのまま寝室へ戻る。真人くんはベッドに背を預け、私の姿をじっと眺めた。

「……うん。やっぱり、その下着よく似合うよ」

「あ……ありがとう」

真人くんはベッドの正面に置いた全身鏡の角度を調整していた。確認するように覗き込むと、朝日を反射した鏡がきらりと光る。

「これでいいね。……ちゃんと準備してきた？」

「……してきた、よ」

「そう。じゃあ——昨日のぶんも合わせて、いつもの感度チェックしようか」

彼は一切こちらを急かさない。急かさないのに、逃げられない。ゆっくりとした口調と、動かない視線が、じわじわと私を追い詰めてくる。

「脚、ちゃんと開いてね」

(恥ずかしい……♡でも、しないと……♡)

私はベッドに上がり、鏡の前に膝立ちになった。それから彼に言われる前に、自分から脚を開いて腰を落とす。真人くんはそんな私の斜め後ろへと移動した。役目を放棄した下着のせいで、鏡には私の——いちばん見られたくない場所が、そのまま映り込む。

(朝の光で、こんなにはっきり見えちゃう……夜より、ずっと恥ずかしい……♡♡)

自分の性器を自分の目で真正面から、しかも明るい光の下で見せられる。これがこの「感度チェック」のいちばん恥ずかしいところだった。

した……っ♡♡ あったかいのが、お腹の中にいっぱい……♡ 満たされて……ますっ……♡♡ 中、ずっと……♡ ひくひく、してますっ♡♡」

「鏡で、今の自分の状態、見える？♡」

「……見え、ます……っ♡♡ 繋がったまま……っ、二人ぶんの体液が、とろとろって……♡ 零れそうに、なって……♡♡ 自分の膣口が……♡ ひくひく、真人くんのをまだ、咥えて……っ♡♡」

「うん♡ ちゃんと見れてるね♡ ……今の状態が、今日の最終的な感度チェックの結果だよ♡」

「う……っ♡♡ こんな状態で、結果、って……♡♡ でも……♡ でも鏡に全部映って……♡ 恥ずかしいのに……♡ 目が、離せないっ……♡♡」

ぼうっとした頭で、それでも私はちゃんと実況を続けた。真人くんは私の髪にそっと唇を落とす。

「うん♡ えらかったね♡ ……昨日サボったのに、感度、ぜんぜん問題なし♡ むしろ、上出来だった♡」